

4月1日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 ルカ 22:14~23:56

1. ルカ

今朝の枝の行列で朗読された ルカ 19:28-40 で、群衆が叫んだ賛美の言葉は、「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光」でありました。各福音書はそれぞれの工夫によって、イエスのエルサレム入りに始まる受難の物語りを、より適切に説明しようとして苦心しています。

イエスの誕生の物語りでは「いと高きところには栄光」に組み合わせられていた「地には平和」が、ここでは「天には平和」に置き換えられました。それはイエスの死が、すべて洗礼を受けて救われた人々を、来るべき神の国へ“過ぎ越させる”贖いであったことを強調するためであったのかも知れません。この世では「闇が力を振っている」(22:53)のであり、その闇の力から私たちを救い出すために(コロ 1:13)イエスは「苦しみもだえ、祈られた」(22:44)のでした。

主の晩餐の設定の物語りの中でイエスが、「言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」と言われたのは(22:18)、救われたすべての人々を一つに集めるときがいよいよ実現するという意味でした(マコ 13:27 参照)。歴史の教会がこの福音の希望に対する信仰に揺るぐことなく踏みとどまる(コロ 1:23)ために、イエスはその頭であるペトロを顧みて励まされました(22:32,61、ヨハ 21:15-19)。

イエスが十字架の上で息を引き取られたとき、「神殿の垂れ幕が真ん中から裂け」(23:45)ました。それはイエスの受難が、神の国の栄光と平和のためであり、それによって天の聖所への道が開かれたことを意味していました(ヘブ 10:19-25 参照)。このイエスによる“罪の赦しの福音”(ロマ 4:25)、“神の国の希望の福音”(コロ 1:5)を、全世界の教会は今年もこの期節に再び聞くのです。

キリスト教という宗教を、神の国を待ち望む(23:51)ことから切り離された“地には平和”のための“世直し運動”のように考えている人々が、いつの時代にもいます。しかし、イエスがその志半ばで無念の死を遂げて中断した“貧しい人々の解放の福音”を、現代の我々が受け継ぐのだという理解は、聖伝と聖書が証言する“キリストの十字架の福音”(Iコリ 1:18, 2:1-2,8-9、ガラ 2:19-21, 6:14)とは、根本的に異質なものであることを知りましょう。

2. フィリ

受難の主日の朗読で古くから用いられて来たこのテキストに、第二バチカン公会議後の朗読配分は、毎年順番に各共観福音書の受難物語りを組み合わせました。多くの教会ではこれを、レシタティーボ風に仕立てて、ミサで朗唱しています。そのことによって教会は、会衆による福音書の受難物語りの理解に、一定の

方向性を持たせるための助けを提供したとすることが出来ます。

「イエス・キリストは主である」(v.11)という信仰宣言は、使徒継承の教会が一貫してよりどころとして来たものです。父なる神はキリストを死者の中から復活させ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。私たちはその名を信じることによって、その血によって贖われ、罪を赦されて神の国の相続人となる恵みを与えられました。その日にはキリストは、私たちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださいます(3:21、1ヨハ3:2)。

この信仰の創始者また完成者(ヘブ12:2)は、使徒たちが伝えた受難物語りの主御自身です。ですから福音書によってイエスの物語りを学ぶことは、使徒たちが伝えたキリストの福音を聞くことなのだということを、理解しましょう。聖書はキリストの福音のことを“十字架の言葉”(1コリ1:18)、“信仰の言葉”(ロマ10:8)、“キリストの言葉”(ロマ10:17)、“御言葉”(ヤコ1:21)などと表現していますが、それらは福音書の読者が、使徒たちから切り離して、自ら勝手にそこで再解釈したり再発見したりする類のものではありません(ガラ1:8-9 参照)。

3. イザ

“かたくなな民”(申9:6)で、“その顔を岩よりも固くして、立ち帰ることを拒む”(エシ5:3)私たちのために、御子イエスは“その身にわたしたちの罪を担って”(1ペト2:24)、「顔を隠さずに、嘲りと唾を受ける」(v.6)ために「顔を硬い石のように」(v.7)して十字架の苦難を忍ばれました。「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」(53:5、1ペト2:24)ことを信じる“教会の信仰”によって、今年も私たちキリスト者の聖週間の歩みが導かれますように。

アーメン。

4月8日 復活の主日

使 10:34a,37~43 コロ 3:1~4 ヨハ 20:1~9

1. ヨハ

vv.8-9 「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

主の復活を祝う全世界のキリスト者と共に、私たちは喜びましょう。その喜びは、聖伝と聖書によって教会が受け継いで来た福音、使徒たちが伝えたキリストの福音が与える喜びであって、信じるすべての人に与えられます。

福音書が成立した当時、主の受難と復活の出来事に関しては、今日私たちが知っているよりもはるかに多くの情報が存在していたに違いありません。それらの中からヨハネ福音書が選んで、主の復活の朝についての記述でまず最初に語ったのは、この“墓は空であった”という報告でした。使徒たちが伝えたキリストの福音への信仰と切り離しては、人はこの出来事について何一つ理解し得ないということ、より鮮明に伝えようとしたのです。

“イエスが愛しておられたもう一人の弟子(恐らくヨハネ)”が、「見て、信じた」(v.8)けれども、それは決して深い福音理解に基づくものではありませんでした。「聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかった」(v.9)のです。弟子のトマスも復活の主を見て信じました(ヨハ 20:29)。しかしその信仰は、「見ないのに信じる人(代々の時代のキリスト者)」「(同)の信仰にいささかも勝るものではないと、イエスは言われました。生前のイエスを目撃した多くの人々が、キリストとその福音を信じませんでした。教会の信仰は、ちょうどテレビのニュースのような単なる目撃証言や報告からの当然の帰結として生じるものではなくて、使徒たちが伝えたキリストの福音の宣教によって起こされたものなのです。

「神は……、この終わりの時代には、御子(の出来事)によってわたしたちに語られました」(ヘブ 1:2)。しかしそれは、ただの客観的な出来事のことではなくて、その出来事に基づく使徒たちの福音宣教を通して神が語っておられるということなのです。

2. 使

「イエスは、…… 生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(v.42)ということと、「この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる」(v.43)という使徒たちの宣教によって、教会の信仰は生まれました。この宣教によって、教会は主の復活を喜び、この御子キリストが(再び)天から来られるのを待ち望みます(フィリ 3:20、1テサ 1:10)。

聖書を学ぶことは、当時の歴史的な事件を探求することによって、そこから何かの謎や、あるいは秘密を発見するためではありません。そうではなくて、私たちキリスト者にとって目的はただ一つ、使徒たちによ

るキリストの福音の宣教に耳を傾けることによって、「イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるため」(ヨハ 20:31)です。復活節の喜びは、キリストの福音への信仰から生まれる喜びです。この喜びが、主の復活を祝う全世界のキリスト者と共にありますように。「信仰がなければ、神に喜ばれる(者となる)ことは出来ません」(ヘブ 11:6)。

3. コロ

vv.3-4 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

洗礼の秘跡によって、キリストと共に葬られ、キリストと共に復活させられた者だけが、キリスト者です(コロ 2:12)。その人は、御国を受け継ぐという報いを主から受けます(コロ 3:24)。神は、使徒たちの宣教を通して私たちに信仰を起こさせ、洗礼の秘跡を通して聖霊の証印を押してくださいました(エフェ 1:13-14)。何という大きな喜び、何という大きな恵みでしょう。

ですから、教会がミサの中での聖体拝領に際して、既に洗礼を受けた人と未だ洗礼を受けていない人を区別するのを、“差別だ”と言って非難する人々は、キリストの福音を理解していないのです。またカトリック以外の他のキリスト教会で洗礼を受けた人を、主における兄弟としての尊敬と愛をもって抱擁することをしない信者は、自らが受けた救いの恵みが何であるかを理解出来ていないのです(エキュメニズムに関する教令3参照)。

すべてのキリスト者によって復活節、すなわち復活の主日から聖霊降臨の主日に至る 50 日間は、一つの祝日として、またより適切には“大いなる主日”として、歓喜に満ちて祝われる。“アレルヤ”が特に歌われるのは、この期節である(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 22)。

ハレルヤ、アーメン。

4月15日 復活節第2主日

使 5:12～16 黙 1:9～19 ヨハ 20:19～31

1. ヨハ

vv.20-21 「弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。“あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。”」

復活の主が使徒たちを遣わされたのは、キリストの(十字架と復活の)福音を宣べ伝えさせるためでありました。(使徒たちが宣教する福音を)信じて洗礼を受ける者は救われるとの約束が、その派遣に伴っていることを、聖伝と聖書は明確に伝えています。ですから「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(v.23)という主の言葉も、教会が信じる人々に授ける洗礼を指していると理解しましょう。

古くから教会では、復活の主日には人々が互いに、“主のご復活、おめでとうございます”と言って挨拶をします。その祝いの喜びは福音に基づくものであることを、今朝のミサの集会祈願は述べています。「あわれみ深い神よ、あなたはキリストの尊い血によってわたしたちを贖い、水と聖霊(洗礼)によって新しい命を与えてくださいます。」ですから私たちはそれに直ちに続けて II コリ 4:14 の言葉を思い起こして喜ぶのです。「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」

この“福音に基づく喜び”を理解することが、聖書の中の主の復活に関する記事を読む上でどんなに大切であるかを、ここで強調しなければなりません。福音書は、使徒たちが宣教したキリストの福音によって、後の世の人々が「イエスは神の子メシアであると信じるためであり、信じてイエスの名により命を受けるため」(v.31)に書かれました。弟子たちが主を見て喜んだのも(v.20)、トマスが「わたしの主、わたしの神よ」と言ったのも(v.28)、かつては理解していなかった福音を今は信じたからからでありました。決して“死んだと思ったイエスが無事に生き返って命拾いした”という安堵などではありませんでした。

2. 黙

キリストの復活は、教会にとってどのような意味があるのかと問うことは、代々の時代の自覚的なキリスト者すべての課題であります。黙示録の著者である“僕ヨハネ(1:1)”は、主の日のミサから切り離されて、一人でパトモスという島で黙想していました(v.9)。彼が生きている時代に対する主日のミサの真の意義が分かり始めたのは、故郷の町の教会のミサのことを考えていたときでした。それは最後の完成の時の先取りである(典礼憲章 8、教会憲章 48 参照)。天上のキリストは、天使たちと共に地上の教会を支配しておられるのであり、やがて「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る」(1:7)ことでしょう。

これが、聖伝と聖書によって教会に受け継がれて来た福音です。この福音から切り離しては、キリストの復活を祝う喜びも、主日のミサを共にささげる喜びも成り立たないことを、すべてのキリスト者は理解しなければなりません。主の復活を祝う全世界の教会で、自覚的なキリスト者一人一人が、今年も特にこの期節に、使徒たちが宣教したキリストの(十字架と復活の)福音に耳を傾ける努力をすることは、重い課題であると知りましょう。

3. 使

原始教会のごく初期の時代に、使徒たちの宣教に著しい奇跡、特にいやしの奇跡が伴ったことを、私たちは聖書で読むことができます。注意すべきことは、イエスの場合にも使徒たちの場合にも、奇跡を“神の国の福音の宣教”から切り離して理解してはならないということです。奇跡は神の国の“しるし”ではあっても、決して救いそのものではありませんでした。原始教会は、使徒たちの宣教によって福音を信じ、洗礼を受けて救われた人々の群でありました。

そのように、現代のキリスト者も、使徒たちの宣教した福音によって救われ、罪を赦された“聖なる者たち”なのです。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」(ロマ 4:25)という、聖伝と聖書によって伝えられた福音は、使徒たちに固く結ばれ、さらに使徒たちを遣わされた復活のキリストから切り離すことの出来ないものです。

「一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」キリストは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」であることを(黙 1:8,18,)、感謝し賛美しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

4月22日 復活節第3主日

使 5:27~41 黙 5:11~14 ヨハ 21:1~19

1. ヨハ

イエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」……イエスは、「わたしの羊を飼いなさい」と言われた。

主イエスはペトロを使徒たちの中の第一の者とし(教会憲章 18)、この岩の上に御自分の教会をお建てになりました(マタ 16:17-19)。使徒ペトロは、独立した個人としてではなくて、使徒たち一同の頭として、救い主イエスの受肉と死と復活の証人であり、今日に至るまで教会の岩、すなわち土台であり続けています。

使徒たちがいなかったなら、聖伝も聖書も生み出されることはありませんでした。聖伝と聖書がなかったなら、私たちはキリストの福音について何も知らなかったことでしょう。教会が受け継いで来た福音も、私たちキリスト者が受けた救いも、すべては使徒たちに起源し、そして何よりも先ず使徒ペトロに遡ることを理解しましょう。

ですから使徒ペトロは今も、教会に託された委託物である聖伝と聖書(神の啓示に関する教義憲章 10)の土台であり続けています。私たちは聖伝と聖書を通して、今も使徒たちとその頭であるペトロに出会うのです。そしてペトロの後継者である教皇も、使徒の後継者である司教たちも、「神のこぼれの上にある者ではなく、むしろこれに奉仕し、伝えられたことだけを教える」のです(同)。

本来のヨハネ福音書は 20 章で終わるはずであったことが、20:30-31 の結語から明らかですが、恐らくそれが書かれて間もないかなり早い時期に、21 章が付加されました。それは古写本や古代文献にこの部分を除去したヨハネ福音書の形が見あたらないことで分かります。この付加は、当時小アジアで顕著になりつつあったグノーシス主義の風潮、つまりペトロを頭とする使徒たちからの伝承を軽んずる傾向に、対抗するためであったのかも知れません。

使徒ペトロを土台としない教会は、キリストの教会ではありません。世界中に使徒の後継者である司教が多くいても、多くの種類の教会が存在するものではありません。もしそれがキリストの教会であるなら、岩である使徒ペトロの上に建っている必要があります。「既に据えられている土台を無視して、だれも他の土台を据えることは出来ません」(I コリ 3:11)。ペトロは使徒たちの中の第一の者として、受肉し、十字架に死に、復活されたイエス・キリストと、代々の時代の教会との連続性を保証する者だからです。

2. 使

vv.31-32 「神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。わたしたちはこの事実の証人であり、……」

使徒たちは、キリストの福音の証人であります。使徒たちはその福音を、「神はイエスを復活させ」

(v.30)「イエスは神の右に上げられ」(v.31)「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(10:42)「この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる」(10:43)「二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださる」(ヘブ 9:28)と宣教しました。

使徒たちを通して伝えられた聖伝と聖書によって、現代の教会に対しても同じ福音の宣教が続けられるために、天上のキリストは私たちのミサのただ中に今朝も来てくださっています。なぜなら、使徒たちが伝える「信仰と希望とは神にかかっている」(1ペト 1:21)からであり、共にミサをささげる会衆は「人間に従うよりも、神に従わなくては」(v.29)ならないからです。使徒たちが会衆に「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを」(20:21)証しするとき、そこには復活されたキリストも共におられます(マタ 28:20)。

3. 黙

黙示録の著者である“僕ヨハネ(1:1)”は、天上の典礼で「玉座に座っておられる方と小羊と」(v.13)に天使たちが賛美をささげているのを見ました。それは地上の教会が待ち望んでいる救いの完成(今朝の集会祈願)の姿であり、その待望の福音は使徒たちに起源し、従って使徒ペトロに遡るものなのです。決して黙示録だけのものでも、使徒パウロだけのもの(フィリ 3:20-21)でもありません。

共にミサをささげる私たちは、心を合わせて祈ります。「過越の神秘によって新たにされた人々が、不滅のからだに復活し、あなたの栄光をたたえることができますように」(今朝の拝領祈願)。

ハレルヤ、アーメン。

4月29日 復活節第4主日

使 13:14,43～52 黙 7:9,14b～17 ヨハ 10:27～30

1. ヨハ

vv.27,28 「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」「わたしは彼らに永遠の命を与える。」

キリストの羊は、キリストの福音を知っています。もしキリストの福音を信じないなら、その人はキリストの羊ではありません。その福音を、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 18」は次のように述べています。

「キリストは人間に贖いをもたらし、神に完全な栄光を帰するわざを、主のその過越の神秘によって成就され、御自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちに(永遠の)命をお与えになった。」

永遠の命とは、来るべき神の国の命のことであって、「彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」(v.28)、「だれも父の手から奪うことはできない」(v.29)と、イエスは言われました。

「復活の主日から聖霊降臨の主日に至るまでの50日間は、一つの祝日として、また、より適切には“大いなる主日”として歓喜に満ちて祝われ、“アレルヤ”が特に歌われる」(同22)のは、教会が、私たちに永遠の命を与えてくださったキリストの福音を「聞き分ける」(v.27)羊の群だからです。

「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ3:1-4)

2. 黙

黙示録の著者である“僕ヨハネ(1:1)”が見た天上の典礼では、「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数え切れないほどの大群衆が、白い衣を身につけ」(v.9)、天の聖所で神に仕えていました。玉座には父なる神と小羊キリストが座っておられ(v.10)、彼らを命の水へ導いてくださいます(v.17)。これが、永遠の命を与えられた民の将来の約束の姿であり、「福音の希望」(コロ1:23)であることを、全世界の教会は今年もこの期節に、再び思い起こして喜びます。

“僕ヨハネ”は現代の教会に対しても、聖書を通して「神の言葉とイエス・キリストの証し」(1:2)を語り続けています。これを聞いて、「秘められた計画」(ロマ16:25)を信じる人たちは幸いです。「時が迫っている」(1:3)からです。その日には、「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(フィリ3:21)

3. 使

v.48 「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉(福音)を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。」

永遠の命とは、イスラエルの「先祖に与えられた約束」(13:32)であって、以前は異邦人には関係のないものでありました(エフェ 2:11-13)。しかし「今やイエス・キリストの復活によって」(1ペト 3:21)「信じる者は皆、この方によって義とされ」(13:39)、ユダヤ人と共に同じ約束を受け継ぐことが出来るようになりました(エフェ 3:6)。初代教会の人々は、この「秘められた計画」を、使徒たちの宣教する福音を通して聞いて信じました(コロ 1:5,26-29)。

歴史の教会が、この同じ約束を受け継ぐ民として、キリストの福音による希望に生きて来たのは、使徒継承によるのであって、使徒たちは今なお聖伝と聖書を通して、現代の私たちにキリストの福音を語り続けています。だから感謝しましょう。教会はキリストの福音を「聞き分ける」羊の群なのです。キリストの羊は、キリストの福音を知っています。もしキリストの福音を信じないなら、その人はキリストの羊ではありません。

「わたしたちは、最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、(神の国の典礼で)キリストに連なる者となるのです」(ヘブ 3:14)から。

ハレルヤ、アーメン。